

「救いたい心」をつむぐコミュニケーションマガジン

赤十字 NEWS

Japanese Red Cross Society NEWS

<https://www.jrc.or.jp>

令和4年7月1日(毎月1日発行) 赤十字新聞 第986号 昭和24年9月30日 第三種郵便物認可

JULY 2022 NO.986

7



わたしも赤十字 献血の協力者 たにぐちしの 谷口紫乃さん【P.4でご紹介】

特集

愛の血液助け合い運動

「最後の献血」に託す思い

赤十字の最新情報をSNSでチェック!



赤十字新聞 編集・発行/日本赤十字社 広報室 〒105-8521 東京都港区芝大門 1-1-3 TEL: 03-3438-1311 一部20円 赤十字新聞の購読料は会費に含まれています。

人間を救うのは、人間だ。

 **日本赤十字社**
Japanese Red Cross Society

【愛の血液助け合い運動】

「最後の献血」に託す思い

もっと続けたかった!

献血は、輸血を必要としている方の命を救うために、健康な人が自らの血液を無償で提供するボランティア活動です。献血できる方には年齢制限などの条件があり、全血献血では男女ともに69歳*までと決められています。長年にわたって献血を続け、最後の1年間に思いを込めて献血する方、70歳の誕生日を目前に最後の献血をする方、それぞれの心境を伺いました。

*65歳以上の方の献血については、献血いただく方の健康を考慮し60～64歳の間に献血経験がある方に限ります。

長崎

献血ルーム はまのまち

ふじ ひろふみ
藤 大士さん
1953年1月17日生まれ



断られた初献血で、健康の大切さに気付く

献血を始めてかれこれ50年。今は成分献血をメインに月に一度のペースで通っています。献血に行く日を決めたら、前日は禁酒し、体調管理を続けています。今年は年始に行ってから、70歳の誕生日まであと何回献血できるかなと逆算し、献血できる最後の1年なので、精いっぱいしていくつもりです。献血は私の生活の一部になっていますね。家族も私が献血でもらうティッシュをアテにしている、家のティッシュが少なくなると、「次はいつ、献血に行くの?」と(笑)。献血ルームに通い続けて顔見知りになった職員さんもたくさんいるので、献血バスを見かけると、今日のスタッフは誰かなどつい確認してしまいます。

私の父は手術で輸血を受けた経験があり、献血ができなかったのですが、町役場の職員で献血を推進する担当でした。なので父の代わりに母が、町に献血バスが来るたび協力していました。そんな姿を見て育ってきて、自分も献血するのが当たり前だと思っていました。人生最初の献血は、高校卒業後に就職した会社に来ていたバスでの献血です。入社して2カ月後に献血へ行ったところ、血液の比重が足りず献血不可に。学生時代に運動部で鍛えて体力に自信があった私はショックでした。親元を離れて慣れない環境で必死に働き、不規則な生活で、偏った食生活を送っていたので、お医者さんから



手作りの腕立て伏せ用器具で夕日を眺めながらの筋トレが日課の藤さん



看護師もお墨付きを与えるほど元気な藤さん。献血ルームに通えなくなることがさみしいと肩を落とす

はそういった環境などが要因ではないかと言われて、**食事や生活を見直して挑んだ2回目。無事献血することができて、心底ほっとしました。そのときに献血できる健康な体、健康的な生活の大切さを思い知ったのです。**

健康のためにも、もっと献血を続けたい

60歳までは設計の仕事をして、その後は福祉関係の仕事に就き、今年の3月まで働いていました。一人でベッドをひょいと運ぶなど、体力的にまだまだ働ける自信はあったのですが、親が亡くなって空き家になった実家の管理とか、職場の若い人たちのことも考えて退職。ストレスのない日々を送っていますが、余力があるので自宅の六畳2部屋のフローリングを一人で張り替えるなどDIYに精を出しています。毎日筋トレ、ウォーキングで10キロ歩いて、体調はこの20年で最高に良い状態。だから、献血ができなくなってしまふということが本当に信じられない。**健康管理にもなっていた大切な生活習慣でしたし、楽しみの一つでもあったので、年齢で区切らず、献血を続けさせてもらえないかなと切に思います。**

だいぶ前のことですが、転居手続きで役所を訪れた時、役所の窓口で困っている高齢の女性がいました。その当時、輸血を受けた人の家族などが献血して血を返す制度があって、その女性は夫が輸血を受けたが家族に献血できる人間がいなくて嘆いていました。私は献血後にもらう献血カードをたくさん持っていたので、その女性に全部差し上げ、とても感謝されました。誰でも献血ができるわけではないんだ、献血できてその人の助けになれてよかったと感じたんです。自分が献血できなくなる分、健康な若い人たちに(ノ)

(ノ)は積極的に協力してほしいですね。口癖でいつも周りに言っているんです。**世のため人のためになる、簡単にできるボランティアだよ、**と。気軽な気持ちでチャレンジしてほしいです。私も、ただ献血できる体だかららせてもらっているだけ、それでティッシュももらえてジュースも飲んで、ありがたいじゃないですか。そんな感じで、気軽に、自己満足するのでもいいんじゃないですかね。

● 献血ルーム スタッフの声 ●

「藤さんは、時間のかかる分割血小板献血や、年始の献血にも毎年協力してくださいました。必ず予約して来所され、常に笑顔で、献血ルームの業務やスタッフのことを考えてくださっているなど、いつも感じていました。私たちは20年以上の年月を共に過ごさせていただき、定期的にお会いし、お話しをしたりすることが当たり前と思っておりましたが、『最後の1年』と改めて考えたら、とても残念で、さびしいです。健康管理や献血のための日々の努力があればこそ、最後まで成し遂げることができたのではないのでしょうか。献血者としてだけでなく、人生の先輩として、頭が下がる思いでいっぱいです」



献血ルーム はまのまち
スタッフ
土井信子さん(左)
吉田小夜子さん(右)

福岡

献血ルーム 天神西通り

むつきみつ お
正月光郎さん
1952年8月27日生まれ



九州百名山、大分県の三俣山で元気に山登りをする正月さん



健康維持に献血を有効活用

私が最初に献血したのは、20歳くらいの頃、私の伯父が病気になり、手術のための輸血が必要だということで病院へ行って血を提供しました。昔は家族や親族に血液が必要になった場合に献血しましたよね。それ以降は、その頃できたばかりの献血ルームも利用しましたが、佐賀の大きな発電所でメーカーの職員として長年勤務し、そこへ定期的に来る献血バスで献血をしていました。

50年近く続けてこられたのは、誰かのためになるボランティアであると同時に、自分の健康のためにもなるから。**献血すると、いろいろなデータが送られてきます。それを見て、そのときの体の状態はどうだったかと確認して健康管理に役立ててきました。**

私は献血のために特別なことはしないで、普段通りの生活をして献血を続けてきました。献血できる期間にはインターバルがあり、私は400mL全血献血をしているので、3カ月置き。帰るときに「次はいつから献血できます」と言われるので、スケジュール帳に書き込んで、それが一つの目標になっていました。全血献血は、短時間で終わるのでいいですよ。長時間じっとしているのが、私は性格的にむかないので(笑)。

健康のために日頃から運動していて、還暦の60歳からマラソンも始めました。福岡マラソンを3回、宮崎と佐賀のマラソンでも走って、この9年でフルマラソンを11回完走。山登りも月に1回くらい行っています。なにもしないと太る体質なので、体重管理のためにも運動しています。あわせて



正月さんが行っている400mL全血献血は採血時間が15分程度。献血できる間隔が男性は12週間後、女性は16週間後で、年間の上限は男性が3回まで、女性は2回までと定められている。成分(血漿・血小板)献血では採血時間が長くなるものの2週間置きに献血することが可能(※年間の上限回数など条件あり)

献血は、自分の体の状態を定期的に確認できて健康のバロメーターになる。健康を意識して維持していると、血管も体全体も若々しい状態でいられる気がしますね。

最近知り合いと献血の会話になって、73歳の方がかれこれ60回以上献血したとおっしゃるので、話が弾みました。その方もとてもお元気なんですよ。献血をよくされていた人は元気だなんて、改めて思いました。やっぱり**自分が健康じゃないと、人に血をあげるということとはできないでしょう?**私はおかげさまで病気で入院したことは一度もなく、薬も飲んでいません。

若い世代にもっと献血をしてほしい

ゴミを拾うなどのボランティア活動は目に見えるから達成感がありますが、献血って目に見えない、誰のために役立つかわかりづらいボランティアですよ。でも、献血ルームで受血者からのメッセージなど役に立っているという情報を見ると、モチベーションにつながります。

年3回の上限で全血献血を続けてきて、今のシステムでの記録は45回。この夏、70歳になるので、今日が最後の献血です。まだ続けられるし、もっと続けたいのに、残念で…。きっと同じように感じて献血を卒業する人はたくさんいると思います。

献血は人助けにつながる身近なボランティア。私たちの世代は献血する方が多いのですが、若い世代がもっと協力できるようになればいいですね。

● 献血の流れ、献血基準について

献血に協力してくださる方の健康を守り、輸血を受けられる方の安全性を高めるための基準を設けています。

詳しくはこちら⇒



<https://www.jrc.or.jp/donation/about/>

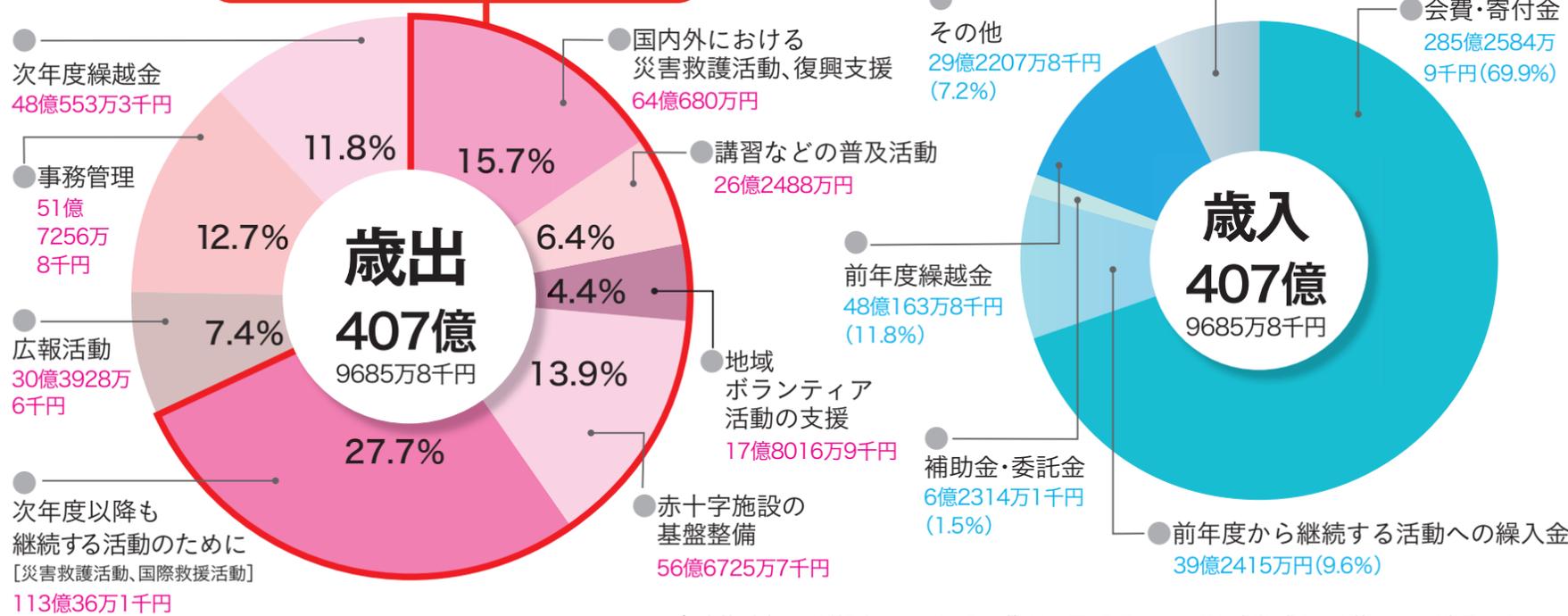
報告

令和3年度 決算概要

令和3年度、日本赤十字社は一般会計と3つの特別会計(医療施設、血液事業、社会福祉施設)をあわせて総額1兆5000億円を超える予算規模の事業を展開しました。このうち、個人・法人の皆さまからいただいた会費や寄付金を主な財源として実施した活動にかかる歳出歳入は以下のとおりです。

一般会計

苦しんでいる人びとを救うために



注1) 本社・支部間で重複計上されている31億6257万2千円については、歳出・歳入から差し引いて表示しています
注2) 千円未満を切り捨てているため、歳出と歳入それぞれの各項目の合計額と表示している合計額は一致しません

全額を被災都道府県に設置される
義援金配分委員会へお送りいたします

災害義援金 20億8599万2千円 ※ 前年度からの繰入金等を含んでいます

特別会計

医療施設

診療報酬を主な財源とする赤十字病院などの運営に伴う収入・支出です。

収入 1兆2225億6743万1千円

支出 1兆1038億6212万6千円

差引額 1187億530万4千円

血液事業

医療機関への血液製剤の供給による収入を主な財源とする赤十字血液センターの運営に伴う収入・支出です。

収入 1659億5209万8千円

支出 1545億6809万8千円

差引額 113億8400万円

社会福祉施設

措置費収入、介護保険事業収入などを主な財源とする各種社会福祉施設の運営に伴う歳入・歳出です。

歳入 191億7412万2千円

歳出 146億8953万7千円

差引額* 44億8458万4千円

注1) 差引額は千円未満を切り捨てているため、差は一致しません

注2) 収入とは「収益的収入」、支出とは「収益的支出」、差引額とは「収益的収入支出差引額」のことで(※の差引額を除く)

令和3年度収支決算の特殊要因 ・新型コロナウイルス感染症対応のための医療機関に対する補助金が交付されました(約1200億円)

わたしも赤十字

今月の表紙

赤十字にはさまざまな形で活動に参加する支援者がいます。
全国の支援者の中から毎月お一人を、温かいメッセージと共にご紹介いたします。



献血の協力者

たにくちしの
谷口紫乃さん

長崎県長崎市/21歳/長崎大学4年生

同年代の献血者が増える
きっかけを作りたい

自分の血液型を知りたい。私が最初に献血をしたのは、そんな気軽な理由からでした。高校2年生のときです。初めて入った献血ルームは、無料で飲み物が飲めるしお菓子がもらえるし、そして何よりも漫画が読み放題! 献血してもそんなに体の負担を感じることもなく、これはいい場所を見つけたぞ、と。当時、少年漫画を受験勉強に活用していたので、一石二鳥だと思いました。それからずっと献血を続けていますが、献血すると健康状態も分かるし、もう趣味になっていますね(笑)。

現在は長崎県内の大学生で構成される「長崎学生献血推進ボランティア連盟」というグループで献血の啓発をしています。若年層の献血者を増やすことを目的に、SNSなどで情報を発信したり、呼び込みのお手伝いをしたり。このコロナ禍で長い間集まることができず、活動のモチベーション

を維持するのが難しいと感じることもありましたが、連絡を取り合い、オンラインでミーティングし、つながりを維持しようと努めました。私たちのSNSに、輸血によって命を救われた方からコメントが届いたりすると、誰かを助けているという実感が湧きます。どんどん若い人に献血してもらいたい。同年代の私たちがアピールすることで、献血に関心を持ってもらえたらうれしいです。私自身は今年度で大学卒業、学生ボランティア組織からも卒業ですが、これからも献血を続けていきます。

献血される方へ

輸血用の血液は、まだ人工的に造ることができず、長期保存することもできません。10~30代の献血協力者数はこの10年間で34%(約90万人)も減少しており、血液を安定的に届けるためには、若い世代の献血へのご理解とご協力が必要となります。

献血へのご協力について詳しくは⇒



TOPICS

「平成29年7月九州北部豪雨」から5年 IT技術を活用した 災害時の新しい支援の形

2017(平成29)年7月、九州北部を襲った豪雨災害は死者・行方不明者42人、全壊家屋300棟以上となる大きな被害をもたらしました。日赤は災害発生直後より医療救護のニーズ調査や救護班による巡回診療などを開始。インフラや交通ルートが寸断された集落も徒歩で巡回し、孤立地域への支援という課題に直面しました。

これ以降も大きな災害が多発しています。こういった**自然災害に立ち向かうべく、位置情報ビッグデータを活用した新しい取り組みが始まっています**。熊本赤十字病院の救援課長で、日本赤十字看護大学附属災害救護研究所の部門長でもある曾篠恭裕さんにお話を聞きました。

「ここ数年の豪雨災害では、線状降水帯による集中豪雨で広範囲な地域が多発的に被災し、短時間で被災状況の把握が難しいことが共通課題です。このため、災害救援技術部門では、携帯電話の位置情報ビッグデータを用いた広範囲の避難状況の把握と、孤立地域の支援について研究しています。2年前の熊本豪雨災害では、私たちはまさしく当事者になってしまいました。熊本県南部の球磨川の周辺で夜間にかなりの降水があり、翌朝、人吉地区の風景が全く違うものになっていました。過去の災害を通じて携帯電話の人流データの有効性を把握していたので、すぐに位置情報サービスを提供しているAgoop社から情報を入手し、交通網が寸断され避難状況を把握するのが難しかった人吉地区や球磨川上流などの人流とハザードマップを照らし合わせ、調査の優先順位をつけました。初期の災害対応支援で人流データを活用できた日本でも先進的な事例です」

赤十字にとっても迅速な救援のためにこういった技術を上手に使うことが、ますます必要になってくる、と曾篠さんは考えます。

「今できることは限定的ですが、新しい技術をあらゆる災害に役立てられるよう研究を進めていきます。災害時の人流データからは、どのエリアの人がいつ、どう逃げたのかなど、実際の人の動きを可視化できるので地域の災害時の避難傾向もわかりますし、いち早く避難場所を特定して、電力確保のための外部給電車両を効率的に配置することもできます。また、これを防災教育のツールとして組み込めば、より進化した防災訓練も可能になります。**素晴らしい技術も研究者が保有しているだけでは意味がなく、ユーザーと一緒に活用を考え、デザインし、社会実装を進めていくことが重要です**。我々は新たな救援技術の基礎研究だけでなく、その橋渡しも大事な仕事だと思っています」

IT技術を活用し、今後の救護活動や支援も大きく前進することが期待されています。



2017年7月九州北部豪雨災害では福岡県支部、大分県支部が被災地で医療ニーズの調査および巡回診療を実施した



日本赤十字看護大学附属
災害救護研究所
災害救援技術部門長
そしのやすひろ
曾篠恭裕さん

災害救援技術部門では災害救援を進化させる革新技術の研究開発を目的に、日赤内外の専門家や企業とも連携を図っている



災害時の人流を通常時のデータと比較するとひと目で違いがわかり、リアルな避難状況が把握できる

献血 まるわかり 辞典

「なるほど!」と思わずヒザを打つ
“献血にまつわる豆知識”を紹介。
第4回のテーマは、数十年で大きく変貌を遂げた「血液バッグ」です。



けつえき - ぱぐぐ

【血液バッグ】

血液保存の難問をクリア! 新素材で進化した血液バッグのヒミツ

血液は生きています。輸血は、血液という人間の生きた細胞を採取し、安全な状態で体内に送り込む行為です。かつて、採血された血液はガラス瓶に保管されていました。しかし、ガラス瓶は割れる、重たいなどの欠点があり、加えて血液の質に関わる次のような問題を抱えていました。

- 問題① 血液は生きた細胞であるため酸素が必要だがガラス瓶は酸素を透過しない
- 問題② 白血球や血小板がガラス壁に付着して数が減少してしまう。それを防ぐため、ガラス壁にシリコン塗布を施す必要がある
- 問題③ 中を減圧している瓶は血液が勢いよく注入され、一部の細胞が壊れる
- 問題④ 減圧無しの瓶は外気に触れやすい構造で細菌汚染の危険がある

ガラス瓶が廃止になったのは1980年。そこに至るまでの血液バッグの開発は、決して楽な道のりではありませんでした。求めるプラスチック素



【血液保存用ガラス瓶と血液バッグ】

(写真左) 血液保存用ガラス瓶
(写真下) 血液バッグは冷蔵や冷凍にも対応し得る素材で製作。成分輸血がスタンダードとなっている現在では、成分ごとに血液バッグを分ける仕組みも確立している



材は、開発の難易度の割に生産量が少ないため採算が合わず、素材業者を探す段階から難航。幾多の苦難を乗り越え、100種以上の配合を試した結果、酸素を透過して血液を安全に保存できる素材が開発されました。さらに、実用化までには赤血球の生存率を繰り返し測定し、同時に保存液など薬液の調剤技術開発も進めました。血液バッグには、お一人お一人の善意の献血を大切に活用するためのこだわりが凝縮されているのです。(※今回ご紹介したのは日赤で採用しているバッグの1つであるテルモ社製のバッグの特徴です)



全国各地
あなたの生活のすぐそばで
日本赤十字社の活動は
行われています。

北海道 道内の芸能赤十字奉仕団が
笑顔のために技を磨く

「第43回 全道芸能赤十字大会 in ちとせ」が4月10日、千歳市で開催されました。コロナ禍で3年ぶりとなる同大会、本来は全道6地区(札幌、旭川、岩見沢、江別、名寄、千歳)の芸能赤十字奉仕団が日々研鑽した芸を披露し合う場ですが、今回は規模を縮小。演芸披露は有志のみとし、無観客での実施に。道内芸能奉仕団は連携を高めるため、関係者には各芸を収録したDVDを配布します。



スコップ三味線の伴奏で軽快に踊る千歳市芸能赤十字奉仕団

長野県 御開帳でにぎわう善光寺で
「いのちを守る活動」

善光寺では、7年ぶりとなる国重要文化財「前立本尊」の御開帳が行われました。長野県赤十字救護奉仕団と同県柔道整復師会赤十字奉仕団のボランティアが、観光客でにぎわう週末に巡回。また、救護所に長野赤十字病院から看護師を派遣し、観光客の急病やけがに対応するなど、善光寺の協力も得て赤十字らしい「いのちを守る活動」を進めています。



赤十字ボランティアは、けが人や体調不良の人はいないか見回る

岐阜県 JRC100周年記念キャンペーン
ありがとうの気持ちを伝えよう

5月8日の世界赤十字デーにJRC(青少年赤十字)創設100周年記念イベント「ワークショップありがとうの気持ちを手紙で伝えよう」をモレラ岐阜で開催。48人の園児や児童が参加し、色鉛筆やハサミを使って、オリジナルの感謝の手紙を書きました。また、母の日でもあることから、参加者にはカーネーションとポケットタオル(ハートちゃん刺繍入り)をプレゼントしました。



手紙を書く子どもや、見守る保護者にもたくさんの笑顔が

京都府 常に危険が伴う「林業」
学生たちに救急法講習を実施

4月26日～28日、京都府立林業大学校で赤十字救急法救急員の養成講習会を実施しました。常に危険と隣り合わせの林業。毎年、学生たちは入学するとすぐに講習会に参加します。今回は、新入生16人が、とっさの手当てや予防に役立つ技術・知識を習得。参加した学生からは「仲間たちに何かあったときに手当てができるようになってうれしい」と自信にあふれた声も。



講習では止血法や包帯法など正しい救急法を学んだ

常任理事会開催報告

令和4年6月23日、令和4年度第3回の常任理事会が開催されました。その結果は下記のとおりです。

記

- 1 理事会及び第100回代議員会に付議する事項について
(役員の選出、令和3年度事業報告及び収支決算の承認)

審議の結果、上記については原案のとおり理事会及び第100回代議員会に付議することが了承されました。また、第一次中期事業計画(モニタリング結果)について報告しました。

理事会開催報告

令和4年6月24日、全国社会福祉協議会会議室(新霞が関ビル)において令和4年度第1回の理事会が開催されました。審議結果は下記のとおりです。

記

- 1 第100回代議員会に付議する事項について
(役員の選出、令和3年度事業報告及び収支決算の承認)

審議の結果、いずれも原案のとおり第100回代議員会に付議することが了承されました。また、常任理事会の理事については、永田昌範氏が選出されました。

代議員会審議結果公告

令和4年6月24日、全社協・灘尾ホール(新霞が関ビル)において開催した第100回代議員会における審議結果は下記のとおりです。

令和4年7月1日 日本赤十字社

記

- 第1号議案 役員の選出について
社長1名、副社長1名及び理事1名が次のとおり選出されました。

社長 清家 篤
副社長 鈴木 俊彦
理事 永田 昌範

- 第2号議案 令和3年度事業報告及び収支決算の承認について
原案のとおり議決されました。

静岡県 **栃木県** プール用マスクをしながら、3年ぶりの「水上安全法講習会」
一方、感染対策をしながら「初の室内講習会」を開催した県も

日赤静岡県支部では、5月13日～15日の3日間、静岡県立水泳場にて3年ぶりとなる「水上安全法救助員Ⅰ養成講習」を行いました。密着度の高い実技講習では、指導員は通常の感染対策に加えて、プール用マスクをしながら指導。受講者からは「受講前は不安だったが、指導員の励ましで最後まで頑張ることができた」と前向きな感想が。指導員からも講習再開を喜ぶ声が上がりました。



コロナ禍で休止していた実技講習は、今後も続々と再開予定

6月13日、日赤栃木県支部初となる室内での水上安全法講習が開かれました。今回の受講者は青少年赤十字加盟校教員。ブルーシートを学校プールに見立て、監視する上で重要なポイントや救助などをロールプレイで学習、さらに同室内で心肺蘇生も訓練しました。水に入らないで受講できる気軽さに加え、室内ならではの利点があり「学校でも実施してほしい」との要望も出ました。



栃木県内では感染予防でプール指導を見送る学校もいまだに多い

愛知県 プロフットサルチームと共に
多文化共生「AED講習会」

「やさしい日本語」での講習を推進する日赤愛知県支部が、パートナーシップ協定を結ぶプロフットサルチーム「名古屋オーシャンズ」と共に、フットサル教室とAED講習を行いました。当日は、ブラジル、アルゼンチン、ボリビア、中国など外国にルーツのある親子26人が参加。子どもたちからは「言葉の壁を感じない」「AEDの使い方を初めて知った」との感想がありました。



外国にルーツのある人も日本人も一緒に楽しめるイベントとなった

山口県 「山口県総合防災訓練」に参加
災害に備え、85機関と連携強化

5月29日、山口県東部の6市町において開催された「2022年山口県総合防災訓練」に日赤山口県支部救護班(医師、看護師などからなる災害時医療チーム)が参加。梅雨時期の大雨や地震を想定し、消防・警察・自衛隊など85機関、約500人が災害時の対応を確認しました。日赤は、訓練会場に設営された避難所内の救護所で医療活動の訓練を行いました。



「被災者役」の地域住民に寄り添う日赤山口県支部救護班

九州全県 ソフトバンクホークス全面協力
献血イベントが大成功!

福岡ソフトバンクホークスが取り組む「ファイト!九州デー」において、4月～5月にかけて九州各地の5球場で献血イベント「いのちのリリース」を開催しました。九州各県を担当する献血アンバサダーに主力選手を起用。公式サイトやSNSを通じてPR動画を配信して呼びかけ、最終日の福岡PayPayドームでは、事前予約103人、当日献血118人という記録的な結果となりました。



献血者には抽選で人気選手の直筆サイン入りグッズが当たった

赤十字はじめて物語

日本赤十字社の9つの事業 その出発点にはそれぞれの「はじまり」のストーリーがありました。

vol. **4** 血液事業

相互扶助の精神に基づく「献血」日赤の血液事業のはじまり

1948年の赤十字国際会議において「血液事業に関する赤十字の役割」が提唱されると、各国は続々と血液事業に乗り出しました。そして1952年、日赤は血液事業を開始。当時の日本では、戦後の混沌とした社会状況下の「売血」による供血が主流となっており、それに伴うさまざまな弊害が社会問題となりつつありました。

金銭的な動機による供血には、ウイルス感染の危険度の高いものが多く含まれていました。また、供血者自身が持病を隠していたり、生活の糧を得るための頻繁な供血によって健康を害したりする事例が後を絶ちませんでした。日赤は、安全な血液を確保し、同時に供血者の健康も守るための啓発、無償供血の呼び掛けを続けましたが、当初は苦戦。しかし、学生を中心とした売(買)血追放運動やマスコミによる報道が追い風となり、1964年の閣議決定を経て、各地の血液センター開設なども進展、善意の献血による血液事業が前進しました。



特設サイトでさらに詳しく

「日本赤十字社東京血液銀行」業務開始



1952(昭和27)年、日本赤十字社中央病院の中に日本赤十字社東京血液銀行(中央血液センターの前身)を開設した

「赤十字を応援!」プレゼント パートナー企業紹介 vol.27 タムラファーム株式会社

家族を救った輸血...献血者への感謝をアップルパイに込めて



同社ではSDGsに寄与する果実生産と加工製造を行う。子どもたちに農業の魅力を伝えつつ、社会課題を自然に理解することを願い、農業体験を提供している

「より健康的でおいしいりんごを皆さまにお届けしたい!」と心掛けて、りんごの生産や加工製造に取り組んでいる青森県の「タムラファーム」。生食期以外にもそのおいしさを味わってほしいと始めたアップルパイやジュースなどの加工品が人気を集めています。日赤とのつながりは、代表取締役 田村昌司さんの奥様が病気の治療のために大量の輸血を受けたことがきっかけでした。奥様は治療のきいもあって快方に向かわれており、田村さんは「献血者の皆さまへ感謝の気持ちを伝えたい」と看板商品である「紅玉のアップルパイ」を青森県赤十字血液センターへ寄贈。同血液センターでは、昨年10月16日～31日の間、県内2カ所の献血ルームにおいて寄贈されたアップルパイを献血者にプレゼントし、田村さんの感謝の思いを届けました。

りんごジュース&アップルソーダ (各500ml/3本詰め合わせ)

3名さまに



商品写真はイメージです

上記プレゼント希望者は、以下の項目を明記のうえ、郵送・FAX・WEBでご応募ください。①お名前 ②郵便番号・ご住所 ③電話番号 ④年齢 ⑤赤十字NEWS 7月号を手にした場所(例/献血ルーム) ⑥7月号に関するご意見・ご感想 ※ご応募いただいた個人情報はプレゼントの発送および弊社からのお知らせのみに利用いたします。

郵送/〒105-8521 東京都港区芝大門1-1-3 日本赤十字社 広報室 赤十字NEWS 7月号プレゼント係 FAX/03-6679-0785 WEB応募/右の2次元バーコードからご応募ください。7月29日(金)必着 ※当選者の発表はプレゼントの発送をもって代えさせていただきます



こちらから応募できます

WORLD NEWS

ウクライナ人道危機



仮設診療所の受付前でフィンランドとウクライナの赤十字スタッフと
(右端・矢田さん、右から2人目・仲里さん)

離れ離れになるウクライナの家族 命と心を支える、赤十字の活動

ウクライナの周辺国に逃れた難民と国内避難民は合わせて約1500万人に上ると言われています。ウクライナ国内に派遣されている日赤職員が現地の避難民支援をレポートします。

**国内避難民の心身の健康を守るために…
仮設診療所も、ついにオープン！**

紛争が激化して4カ月、国際赤十字のサポートを受けてウクライナ赤十字社は438万人以上の人々を支援してきました(6月2日時点)。ウクライナでは、先の見えない情勢の中、さまざまな事情で家族と離れての避難を余儀なくされる人々がたくさんいます。

ウクライナ西部の国境沿いの町・ウジュホロドには日赤職員の矢田結さんが、ウクライナ危機対応の連絡調整員として派遣されています。

「6月1日はウクライナの『子どもの日』。赤十字ボランティアも、食料など救援物資を配布する傍らで子どもたち向けの救急車乗車体験やお絵かきイベントを実施しました。ここに避難している女性や子どもたちが、毎年お祝いしているイベントを避難先でも楽しめた



子どもの日にウクライナ赤十字社が実施したお絵かきイベント

ことは前向きな一歩につながったのではないかと、皆さんの笑顔を見て感じました。赤十字は救援物資の配布場所の近くに子どもが自由に遊べるスペースを常設しているので、引き続き母子の憩いの場になるといいです」と矢田さん。

そして6月15日、フィンランド赤十字社と日赤のスタッフ(大阪赤十字病院の薬剤師・仲里泰太郎さん)が設営を進めてきた仮設診療所が、ついにオープンしました。多くの国内避難民の保健医療ニーズに対応していくためです。

「ウクライナ赤十字社は、このような緊急時の仮設診療所を初めて運営します。州政府との協定の締結や医療者の雇用などを着実に進めて、ようやく実現しました。保健医療分野に強みを持つ日赤として、今後もどのような支援が提供できるか考えていきたいと思っています。」(矢田さん)

赤十字の仲間となった避難民、平和への願い

ウジュホロドの赤十字ボランティアの中には、激戦地からの避難民もいます。首都・キーウから避難し、診療所設営の技術ボランティアとして働くディーマさん(36歳・男性)は妻や高齢の両親をポーランドに避難させ、知人を頼って1人でウジュホロドにきました。「避難して来たこの地で、たまたま赤十字を

見かけました。避難民となり困っている人々のために力になりたい。赤十字の仲間になればそれができるのではないかと考えてボランティアになりました。妻もポーランドでウクライナのためのチャリティー活動をしています。その姿を励みに自分もこの地でしばらく頑張ろうと思います。」(ディーマさん)

キーウでは銀行や貿易関係で働いていたディーマさんにとって建設や整地などは慣れない仕事ですが、「友だちも多いこの町で、今自分ができることをしたい」と語ります。

ウクライナでも比較的安全とされるウジュホロドですが、毎日のように空襲警報が鳴るなど紛争下であることに変わりはありません。職員やボランティアの安全などにも十分に配慮しながら、日赤は現地で必要とされる支援を実施していきます。



国内避難民でもあるディーマさん(左)と矢田さん

皆さまからお寄せいただいた「ウクライナ人道危機救援金」などから国際赤十字に対して以下のとおり緊急資金援助を実施しています。

合計支援金額 **47.2億円** ※2022年6月30日時点
(内訳:IFRC 23.6億円/ICRC 23.6億円) 詳しくはこちら⇒



© Alex Wynter / IFRC

赤十字、世界の「現場」から

supported by IFRC

国際赤十字・赤新月社連盟(IFRC)、赤十字国際委員会(ICRC)、日赤の事業地で切り取られた1枚。知られざる世界の赤十字活動。

タンザニア、ミティンド盲学校。肌・髪・目などの色素が生まれつき不足している「アルビノ」の子も共に学んでいた。2007年以降、赤十字の支援するこの学校はアルビノの子ども100人以上を保護し、教育環境を提供した。呪術的な目的で襲われ、体の一部が切り取られたり殺害されたりする事件が多発したためだ。

タンザニアでは多くのアルビノの人々が身を隠し、勉強や仕事ができなくなった。タンザニア赤十字社はアルビノに対する迷信や差別を払拭するため、正しい知識の普及などを実施。現在この活動は終了したが、同社は引き続きアルビノの人々の特別なニーズを考慮した支援を継続している。